

東亞經濟研究所

京都帝國大學
經濟學部
內學

年四回（二月、五月、八月、十二月）發行

東亞經濟叢論

第貳卷 第四號

昭和十七年十二月

附錄 南方文獻目錄

大東亞戰爭の本質……………	經濟學博士 谷口吉彦
支那私鑄考……………	經濟學士 穗積文雄
北支緊急物價對策の一斷面……………	經濟學士 德永清行
舊英領馬來に於ける印度人勞働者……………	經濟學士 福田省三
フランス領有前後の安南社會……………	經濟學士 鍵本博
支那に於ける工業化の基本問題……………	經濟學士 名和統一
支那の石炭鑛業經營について……………	經濟學士 菊田太郎
支那製絲業の生産形態……………	經濟學士 堀江英一
華僑と買辦……………	經濟學士 鈴木總一郎
再組織下にある最近の佛印經濟……………	經濟學博士 松岡孝兒

（禁轉載）

書肆 有斐閣 發行

支那に於ける工業化の基本問題

——工業化と農業的基礎——

名 和 統 一

一 序

近代支那がその中に輝かしい將來を見出すとともに、その過程の行き詰りに、或はそれが生み出しつゝあつた數々の社會的禍害に面して、或は焦慮し、或は惑亂した最も深刻な問題は支那の工業化にあつた。多數の重要な問題がこの基本的問題に絡み合つてゐた。

數字はかなり古いがフーゲマン教授が『世界經濟の構造と律動』の附録統計表に掲げた一九二五年、世界各國人口一人當り機械使用額を、そしてその中の北西ヨーロッパ諸工業國の平均を一〇〇として算出した各國の一人當り機械使用額指數を並記すれば次表の如くである。

一人當り機械使用額指數	
R.M	指數
合 衆 國	126.7
イ ン ダ	93.2
イ ン ダ	296

イギリス, スイス, オーストラリア, ドイツ, ニューゼaland	53.4—33.6	200—100
ベルギー, ルクセンブルグ, オランダ, スエーデン, デンマーク	24.9—17.4	100—50
オーストリア, アルゼンチン, フランス, ノールウエー, チェコスロヴァキア, 南阿蘭邦, チリ, イタリア, フランス, ハンガリー, ラトビア, リトニア	15.5—8.0	50—25
日本, ベルギー, メキシコ, エストニア, ウルグワイ, スペイン, ポーランド, フランス	6.3—4.0	25—10
エジプト, ブラジル, アルゼンチン, コロンビア, ホルトガル, リトニア, フランス, ガリシア, ユーゴスラヴィア, ボリヴィア, チュニス, ルーマニア	2.9—1.6	10—5
佛領モロッコ, 蘭領印度, トルコ, 英領印度, シアム	1.3—0.6	5—1
支那	0.2	1—0

備考 (1) Ernst Wagemann, Struktur und Rhythmus der Weltwirtschaft, S. 406—8 に掲載された一人當り機械使用額に據る。
 (2) 指數は Eugene Staley, World Economy in Transition, P. 70 に於てスティーラーのラージマッシーンに基いて算出せるもの。

上表によつて支那の工業化が世界的に如何に遅れてゐるかと同時に支那に於て將來工業化の餘地の大きなことの大體の概念が得られるであらう。

支那にとつての問題は同時に又支那を繞る列強、そして世界經濟にとつて最大の經濟問題、政治問題の一に屬した。支那の工業化こそ從來の支那市場の限界性、狹隘性を打破し、高度工業製品たる機械の大なる輸出市場を約束し、有り餘つた資本に有利な投資の捌け口を與へるものと期待し、或は逆に支那の工業化は支那市場への從來の自國製品の輸出を萎縮せしめ、その非類なき低勞賃の威力を以て世界市場に於ける新なる競争者として現れ

るであらうことが怖れられた。

日支の戦争によつて、更に大東亞戦争によつて、支那の情勢、東亞の情勢は全く一變した。日本の軍事力、政治・經濟力を基軸として東亞の新しい經濟史が繰りひろげられやうとしてゐる。しかし外部的な問題の解決は同時に内部的な問題の解決を迫る。「戦争を伴つてであるにせよ、それなしにであるにせよ、來るべき支那の工業化を措いて東亞に於ける基本的問題の解決はない¹⁾」とニム・ウェールズ女史は述べてをるが、彼女の立つ立場如何はとにかく、蓋し肯綮に當つてゐる。支那は工業化するであらうか、工業化するとしても支那は如何なる仕方では工業化するであらうか、如何なる程度で工業化するであらうかは支那にとつて問題であるのみでなく、われわれ日本にとつて問題である。日支經濟合作の必要が如何に強調されても、強調し過ぎると云ふことはないが、たゞ支那工業化の性質とそれが支那の經濟構造、更に日本及び東亞の全經濟との如何なる聯關に於てその展望を持つかに對する評價、認識を基本的には先決問題とする。

支那經濟の衰退は生産力の低位にあり、生産力の向上はとりわけ生産過程に於ける動力及び機械使用の増進、即ち工業化に求められると云ふのは正しい。だがそれではまだ抽象的である。技術的過程としての工業化は社會的過程として如何なる形に於て實現されるか、されるべきであるか。「支那の諸地方の様に、人間が環境に壓し拉がれてゐる所では、機械や動力が彼等の困苦を救ふ非凡の力を持つたものゝ如く歓迎せられ、之等の及ぼす影響を統制することの必要などを考慮しないのも、無理のない事である。併しかかる態度こそ、彼等の夢想してゐる結果を却つて危くするものなのである。非凡の力を持つたものは、よき召使ではあるが、悪き主人であることが

1) Nym Wales, China Builds for Democracy, A Story of Cooperative Industry, 1941, P. 14.

ある。機械に人間を解放する力があるならば、之は又人間を奴隷にする力をも持つてゐるわけである。」とトーネイ教授は警戒の言葉を發してゐるが、人間が機械を使用するのか、機械が人間を使用するのかが更めて支那に於て深刻に問はねばならぬ。

支那に於ける工業化を繞つて現在の戦争のずっと以前から支那に關心を有する英米經濟學者及び支那政治家、經濟學者の間に眞劔な論争、問題の追究、展開の過程があつた。一は都市工業化、工業資本主義化説であり、他はそれに對する懷疑論、支那農業の生産様式を基礎とし、その上に独自の工業發展を見出そうとする見解である。それは資本主義の發展に關してかつてフランスに於て、ロシアに於て問題とされたところであり、印度經濟學に於て今日問題とされてゐる如くである。²⁾それは正統派經濟學者と浪漫派經濟學者とのかの論争の再現であるとも見られ様が、同時に異なる歴史的條件、地理的環境に於て、即ち現代支那に於て問題の所在と解決を迫つてゐるところのものである。

二 工業自由資本主義化説―都市大工業推進説

工業自由資本主義化説―都市大工業推進説の代表的な論者として『支那―一文明の崩壊』（一九三一年刊）の著者ナサニエル・ペツファ―氏を挙げ得るであらう。彼はこの書物の中で繰返し同じ趣旨を述べてゐる。

「たゞ、一つのこと、それは確實である。支那は工業化するであらう。生産及び配給を機械化し、その社會組織を工業主義(industrialism)の要求に合致する様改革するであらう。今となつてはそれ以外には何もなし得ない。元に歸るには既に餘りにも行き過

- 2) R. H. Tawney, Land and Labour in China, 1932, PP. 142-3; 浦松佐美太郎、牛場友彦譯、支那の農業と工業、156頁。
- 3) 島恭彦、印度經濟學の成立とその方向、東亞經濟論叢（昭和17年5月）、116-38頁參照。

きてゐる。支那は工業化するであらうか、そうしなければならぬのかどうかが管ては——そんなに古い昔のことではない——問題であつた。今はたゞそれをなし得るかどうか、如何にしてそれをなし得るかだけが問題である。工業化された後にその凡ゆる貧困、飢饉、無慈悲な勞苦の故にあるであらうよりも、古き支那に於て遙かに大きな階級間の幸福がなかつたかどうかは抽象的には尙論議の主題とされるであらう。機械化がその最も驚歎すべき事實を作り上げたアメリカの實例は必しもそこに歸着すべきものではない。アメリカの富、愉樂、物質的安樂にも拘らず、その人民は幸福だとは云はれない。内的な安全と均衡とがまだ——多分に生み出さるべきである。物に於て豊富ではあるが、内容に於てはまた貧しい。凡てこれらの論議はアカデミツクな思索の問題である。支那にとつて問題は事實に於て答へられた。支那は工業化しつつあるし、しなければならぬ。支那は又それを欲してゐる。思慮ある支那人は工業主義なしには支那は存続し得ないことを確信し、又彼等の多數はそれとともに支那の人民がより豊かな生活を持ち得るであらうことを等しく確信してゐる。」

「支那に於て工業主義が具體化する時にそれはどんな形態をとるであらうか。工業都市に於ける巨大工場、社會經濟的にその一切の隨伴物を伴ふかの模型を再現するであらうか。或はそれにはもつと獨特な型が造り出されるであらうかについて重要な思索が存する。具體的に云ふとピッツバーグ、デトロイト、ランカシャー綿業都市、ルール製鐵都市と云つた、素晴らしい生産量と各地に分歧を有する單一會社を持つ大工業中心地が形成されるであらうか、或は機械によつて生産する近代工業ではあるがその組織は小規模であり、動力機械及び勞働節約的工夫を充分に備へたものではあるが、精々百人或は二百人以上の勞働者を使用することはないと云つた小工場の形態をとるであらうかが問題とされる。發展は後の方向に進むであらう、その方が支那人の經驗及び慣習に合致してゐると信ずる人達がある。原料の購入、製品の販賣に於て協同機關が設けられるならば、より實現し易いであらう。だが西洋に於ける全傾向は別の方向にある。大戰後の合理化、合同、連鎖販賣による配給組織、ヘンリー・フォード或はステイネスと云つた大會社の出現は經濟發展の方向を指示してゐる。大規模經營を可能ならしめる經濟はその途を不可避ならしめてゐる。合衆國及び獨逸に於ける更に、大なる集中化への磁性運動は決して偶然ではない。それは機械の性質によつて豫定され、その論理的結果として出現してゐるのである。その慣習に合つた本能的な産業的個人主義を固執せんと努めた後に英國も亦この事實を見出しつゝある。支那はこの潮流に抗し得ないであらう。資本、企業及び勞働の上海、漢口、廣東及びその他少數の大都市への集中傾向、合衆國外統の複寫こそ豫想されるところのものである。」²⁾

「支那は民族國家として消滅することはないとすれば、それではどうなるか。好かれ惡しかれ、又その機會がどうであらうと

1) Nathaniel Peffer, China: The Collapse of a Civilization, 1931, P. 191.
2) Peffer, ibid., PP. 202-3.

支那人は彼等自身を作り更へ、近代世界に足を踏み入れ、知識の進歩及び科學の發達を利用すべく決心してゐる。彼等はたゞ西洋を模倣することによつてのみそれをなし得る。具體的措置は工業化と同時にそれに結合する社會的及び經濟的變革である。彼等は工業化し得るであらうかどうか、如何にして、又如何なる作用を自らに及ぼすことに依てそれをなし得るかが試験されてゐる。彼等の橋は最早や撤去された。若しも失敗するならば萬事休す、その時支那は滅亡するまでである。二〇世紀の世界に入込むならば、その世界的條件の上に生きねばならぬ。そうでなければ全く衰滅するであらう。彼等が成功するか失敗するかについてはいゝ加減なことは何も語れないが、商業及び金融に於て示した支那人の昔から有名な適應性から見て、機械による生産及び配給の純粹技術的過程に關する限り、彼等はそれに習熟するであらう。それに必要な心理的調整を施し社會的障礙を除去するならば、大工場、大規模生産、黒煙天にとゞく煙突の林立した、人口の密集した巨大都市、集中的な分配組織、商品及び商品以外のものについてもその規格化、機械的な勞働節約手段による煩雜な日常生活の簡素化を彼等が有するに至るであらうことを豫想するのは充分に理由がある。」(圈點引用者)

資本主義化が各國經濟史を通じて共通の必然法則であり、ヨーロッパ諸國、アメリカが進つた過程を支那は踏襲するのみでなく、段階的に、徐々にその成長を待つと云ふのではなく、ヨーロッパやアメリカに於ける工業資本主義の最新の形態をそつくり、そのまゝとして一舉に支那は模倣し、移植しなければならぬ。それが支那に於ける工業化の途であるとする。それに對して支那では數々の阻碍要素、抵抗要素が存するであらうが、それらは自然的に、固有の絶對的な障礙ではなくて、單に相對的な、前期的な抵抗に外ならぬ。工業資本主義化阻碍の原因であると云ふよりはその未發達の故に結果するところであり、工業資本主義化の達成によつて自から解決さるべきものであり、その凱旋行進の前に衰滅の運命にあるものである。

この様な見解が『青年』支那の政治家及び知識人を魅了し、その積極的提唱者を見出したことはトニー教授の指摘するところである。「國民政府の政策を読み、又支那人の近代産業讚美論を聞いてゐると、恰も一八五〇年

代の英國、一九二〇年代の米國に住んでゐる様な氣持にさへなる。嘘の様であるが、フォードに對し、彼等の言辭が示してゐる様に、絶對無條件に憧憬してゐる様な意見も支那にはあり得るのである。⁴⁾

三 工業自由資本主義化に對する反對説

支那に於ける工業化が工業自由資本主義、都市工業化の方向に於て展開するであらうし、その展開を無條件に促進すべきであると云ふ説に對して反對説の存すること、ベツファー氏自身それを念頭に置いてゐたことはさきの引用に於ても現れてゐるところであるが、支那工業化問題に關する外國人學者及び支那人學者の見解は、何れかと云へば、その反對説の側に於て有力化しつゝあつた様に思はれる。慢性的農業恐慌に加ふるに世界恐慌の打撃を受けて深刻な農村の窮乏、工業化の一般的停滯、奥地農村の疲弊を犠牲とする上海經濟及び工業の局地的、畸形的繁榮が無條件都市工業化、工業自由資本主義化に對する反省を促がしつゝあつた如くである。テイラー教授¹⁾及びトニー教授がそれであり、ラムソン教授²⁾之に倣ひ、ソールター報告に於いて比較的體系的に述べられてゐる。近くは重慶政權下の工業化問題を把へてニム・ウェールズ女史の「工業合作社論」に於て強張さるゝところであり、支那人學者の間では方顯廷教授が戦前からこの説の代表者として現れてゐた。

支那にとつて工業化が必然的であり、必要であると云ふ認識に於ては、この派にも共通であり、トニー教授は述べる。「工業化が良いか悪いかと云ふ議論は既に二十年も時代遅れである。數字にも現れてゐる様に、工業化は既に行はれてゐるのである。……問題は工業化が發展するかどうかと云ふ事ではない。明かに工業化は起るべ

4) Tawney, *ibid.*, PP. 130—1. 邦譯141—2頁。

1) J. B. Taylor, *Farm and Factory in China*, 1928, PP. 1—2 參照。

2) A. D. Lamson, *Social Pathology in China*, 1935, PP. 250—2; 前島豐譯、支那社會病理學、323—5頁參照。

きものである³⁾。だが問題は「支那の工業化が如何なる方法によつて行はれ、如何なる結果を作り出すか⁴⁾」にある。支那は歐米の單なる模倣ではなく、自分自身の經濟的基礎、社會的體様から出發した獨自の工業化の途を見出そうとする。「近代産業を機械仕掛の玩具の様に精巧な發明品と考へ、之に必要な新しい技術を實施すべき社會の状態を無視して、單に嗜好にまかせて輸入し得るものゝ様に思ふことは實に馬鹿げた程幼稚な考へ方である⁵⁾」と極言し、「勿論、支那は工業化するとしても米國、獨逸、英國等に於けると同じ意味で工業化することは決して有り得ない⁶⁾」と判斷する。支那に於ける工業化は其自身の社會的・經濟的基礎より出發し、支那的に變形されたものとしてその獨自の發達に成功するか否かにかゝつてゐる。

「支那は既に存在してゐる自分自身の經濟的基礎から出發しなければならぬ。そして支那に於て最も適してゐる所の、最善の條件を持つ産業を發達せしめ、又支那が既に所有してゐる所の特長を發展せしめて行かなければならぬ⁷⁾」

「斯くの如く、制限し、馴致された資本主義産業が、果してその本來の經濟的特徴を失はずにゐるものかどうかは、唯時が示し得るのみである。併し一つの豫言だけは云ひ得るかも知れない。即ち外國から輸入され、支那式に變形せしめられた他のものと同様に、之も矢張り全く支那式のものとなつて弘まるか、或は全く成功しないかの何れかである⁸⁾」

然らば、トニー教授は具體的に如何なるものに支那工業化の基礎を見出すのであるか。それは農民的工業乃至中小規模工業であつて大規模工業ではないと云ふ。

「或種の重要な事業に於ては、大規模生産がその能率増進の要件をなしてゐると云ふ理由の下に、凡ゆる種類の事業にも、之を同様に必要なものとなし、大規模生産の普及を早めることが、經濟進歩を起す唯一の方法であるとする様な、大ざつばな考へ方は間違つてゐる。……支那は、大體に於て、農民及び手工業者の國であり、將來も亦永くさうであらう。支那の昔からの經濟制度の力を無視することは、大きな判斷の間違ひを起す原因であらう。テラー教授が論じた様に、小さな生産者を助

3) Tawney, *ibid.*, P. 144. 邦譯157頁。
4) Tawney, *ibid.*, P. 144. 邦譯175頁。
5) Tawney, *ibid.*, P. 130. 邦譯141頁。
6) Tawney, *ibid.*, P. 136. 邦譯149頁。

けて、その技術を改善し、その産業の金融組織、商業組織を強靱ならしめ、彼等をしてその地位を維持し得る様にするのが、賢明な策である。」

支那に於ける工業化のこの國農業構造との聯關は、國際聯盟の對支技術援助の使命を帶び、全國經濟委員會の招聘を受け、前南京國民政府の顧問であつたアーサー・ソールター卿の一九三三年末渡支後約三箇月に亘る支那の財政・經濟に關する調査研究結果の報告書に於て極めて的確に取上げられてゐる。支那の工業化は農業生産を基礎とし、農業生産の増大、農民所得の増大を楨杆とし、その幅に應じて工業化は進展するべきであり、農民生産と結合した小工業、中小規模工業が大規模工業よりも先に着手するべきである。總じて支那の工業化は順序を追つて進歩すべきであり、段階を飛躍してはならぬとしたのである。

「支那の工業化は徐々にそして主として國內市場の基礎の上に進行しなければならぬ。それは第一に農業生産を基礎として、工業は樹立され、然る後に之によつて發達し得た工業の消費能力の上に發達し得るのである。より多くの勞働を要し、資本裝備を要すること比較的少き工業が、並びに高度に進歩した工業組織及び金融組織と結び付いて運營する、大規模工業によつてするもその利益するところが甚しく大きくはない種類の製品を生産する工業が選擇されねばならぬ。」⁷⁾

「支那の工業發展は主として支那民衆の購買力に依存しなければならぬ。支那にとつて工業化は農業發展のアルタナティブではないと云ふことが特別に強調されなければならぬ。反對に農民の生産剩餘の増大が工業的發展がその上に築かるべき基本的基礎であらねばならぬ。この基礎にして與へられるならば、工業的富の重要な上部構造は築かれ得る。然るに若し農民の生産剩餘が現在の如く少い場合には大なる工業發展の健實なる基礎は存在しない。」⁸⁾ (圈點原著者)

「支那經濟生産の基礎はその農業生産にあり、そして將來もさうであるに相違ない。支那の基本問題は食糧生産の條件を改善することによるか、或は又副業的手工業を發達せしめるかによつて農民の生産を増加するにある。農村工業の發達は原則として農民購買力に依存しなければならぬ。支那は順序を追つて進歩すべきであつて、その段階を飛躍してはならぬ。」⁹⁾

7) Tawney, *ibid.*, P. 135. 邦譯147頁。
8) Tawney, *ibid.*, P. 132. 邦譯143頁。
9) Tawney, *ibid.*, P. 145. 邦譯159頁。

10) Sir Arthur Salter, *China and The Depression*, Supplement to the

方顯廷教授はその論文『吾人の工業化に對して持つべき認識』に於て「近來國內經濟萎縮し、農村破産に瀕するや、憂國の士は交々立つて農村復興の策を唱へ、議論は紛々として主張は大いに分れてゐるが、これを綜括すれば大體二派に分れることが出来る。一は『農業を振興して以て工業を誘導する』となす主張であり、他は『都市を發展し、以て農村を救済する』となす説である。仁者は仁を見、智者は智を見る、各々その理由がある」と説き起し、支那經濟の發展は農・工業の均衡的發展に求めねばならぬとする。

「中國は農業國であるから、工業を發達せしめ様と思へば必ず農業を發達せしめねばならぬ。蓋し農業が發達し、農民の購買力はその生産増加に依つて始めて増加するのであつて、農民の購買力増加があり、始めて工業はその基礎を安定せしめ得るのである。移民による開墾、耕種方法の改良、農村發展を阻害する種々の障礙の除去を計る外に、農業は季節的産業であるが故に、農村工業を提唱することにより、農民の餘暇を利用し、其收入を増加し、以て農民購買力を増進せしめねばならぬ。如何なる種類の農村工業を起すのか、都市工業と衝突しない様にするにはどうすればいいかは尙研究を要するが、總じて吾人の見る所では中國經濟の建設は一の全體的問題であり、現在中國が速かに着手すべきは輕工業であつて、重工業ではない。小工業であつて、大工業ではない。都市と農村とともに尊重する工業であつて、都市偏重の工業であつてはならぬ。」¹⁴⁾

四 工業自由資本主義化の歴史的條件

私は以上支那の工業化を繞る二つの對立する見解を紹介して來た。扨て私は之等の諸家の見解に據りつゝ或意味ではこれを補足し、或意味ではそれから一應自由に、私自身に與へられた問題として考察を進めたいと思ふ。結論的に云ふならば、私自身最近反省熟考の結果、何れかと云へば支那工業化は後の方向により、大なる可能性が存するのではないかと考ふるに至つてゐる。

I 工業自由資本主義化説の論理

支那に於ける工業化の基本問題

第二卷 八七九 第四號 一一五

Economist, May 19, 1934, P. 16; 井村謙雄, 歐米の對支經濟侵略史(昭和16年) 346—7頁。

- 11) Salter, *ibid.*, P. 13. 井村前掲, 337—8頁。
12) Salter, *ibid.*, P. 13. 井村前掲, 338頁。

a 大規模工業化 大量生産化、資本及生産の集中と集積とは工業生産の必然性であり、その世界的競争、世界的存在の條件である。支那の工業生産も世界市場の聯環に繋がつてゐる限り、それからは孤立してゐない限り

(1) この法則の貫徹は必然的であり、

(2) 而もこの法則の必然的貫徹は徐々に行はれるのではなく、極めて短期間に急速に、壓縮的に行はれねばならぬ。即ち最初から高度に進んだ世界的水準に近い大規模工業とその最新技術とを以て出發點としなければならぬ。そのことなしにはこの國の工業生産は維持され得ない。

b 獨立小工業者の驅逐、農民的家内工業の破壊、農民の没落、土地からの解離、前期的經濟・社會の崩壊は好むと好まざるとに拘らず、その必然的結果である。大工業は手工業者、農民的生産を破壊することに依てその國內市場を創出し、農民及び手工業者を資本制工業及び農業の賃労働者に轉化し、資本制生産の圈内に包攝することによつて自動的にそれ自身の内部で生産及び消費をとともに均衡的に擴大して行く。支那に於てもその例外ではないと云ふのが工業自由資本主義化説の論理である。

II 各國に於ける工業化の歴史的條件（及び地理的環境）

(1) 外國貿易・海外移民の役割 農業に於ける資本主義的要素の展開が先行し、マニユファクチュラから、

更に産業革命が自主的に展開して大工業が支配し、『世界の工場』となつた古典的工業資本主義國イギリスの場合（そこでも外國貿易及び海外移住が工業資本主義化を促進し、容易にした點は重要ではあるが）については措く。其他の諸國はイギリスに對しては後進國であり（更に順次に他の後進諸國に對して先進國となつたが）、進んだ工業資本主義を先進

13) 方顯廷,「吾人對工業化應有之認識」〔方顯廷編輯, 中國經濟研究(民國27年)], 599頁。

14) 方顯廷, 前掲601—2頁。

國から移植した點では共通であり、在來の經濟組織、農業組織が資本主義的に如何に改變されたか、又は工業資本主義が在來の經濟組織、農業組織と如何に結合し之を自己の下に従屬せしめたかの共通の問題を有つた。

工業資本主義化の旋回は理論的には外國貿易を必要とせず、國內市場のみを以て足るとされる。しかし農民的生産が破壊され、而も農民が未だ賃労働者として大工業（又は資本制大農業）に吸収されて了はない工業資本主義の始發期又はそれへの轉換期に於て、農民は零落せしめられ、その購買力は、最小限にまで減少せしめられる。

「彼等が被雇傭労働者として新しい生活諸條件に入込んで了ふまでは、彼等は新に生じた工業に對して極めて拙劣な市場たるの役割をなす」のであつて、大工業的生産の飛躍的增加に對し、國內消費量は漸次的にしか増加せず、絶對的に減少さへする。農・工業生産に於ける生産力の發展不均衡、工業製品消費者たるべき農民の窮乏は大工業にとつて國內市場の制限であり、それに對する脱出路、農民窮乏に對する緩和手段は外國貿易と海外移住とであつた。かくして工業資本主義はその市場的條件を充し、農・工業の均衡をとり得た。即ち外國貿易或は海外移住が工業資本主義移植・成立の事實的條件をなしたのである。外國貿易なく、海外移住なく、専ら國內市場のみを以て展開された國、ロシアではその國土の特有の地的理條件に因り資本制大農業の展開が進行した（工業資本主義化が既に社會的に編成された後の消費不足、相對的過剰人口の問題から起る外國貿易及び海外移民必然性の問題はこゝでは別個である）。

A プロシヤの場合 プロシヤでは地主の資本制農場經營への轉化が行はれた。没落せしめられた農民は急激に發達せる資本制工業に吸収され、一部はアメリカへの移民の大量的氾濫となつた。

B ロシアの場合 ロシアは農業國であつた。移植された大工業にとつて外國貿易はなかつた。それだけ轉換過程の苦痛

は大であつた。だがそこでは人口稀薄な、廣大な國土と國土の地理的状況が機械的耕作に適してゐた。一部の貴族又は富農による資本制大農業の展開が可能であつた。農民は全部ではないが、その少からぬ部分が農業労働者として又工業労働者として吸収され、かくて國內市場が形成されたのであつた。

C アメリカの場合 封建ヨーロッパから脱出した、資本家的精神に横溢した小市民と農民とによつて最初から建設された肥沃にして未占有の廣大の土地を備へた合衆國の場合は全く特殊である。そこでは資本制機械農業が思ふ存分展開した。労働力は不足した。労働力不足の程度に應じて移民が労働者として迎へられた。資本制農業に於ける生産力の増大が、大工業を誘導し、大工業に於ける生産力増進に略比例して農業生産力の増進が可能であつた。かくて大工業によつて國內市場は廣大であり、外國貿易の必要は殆んどなかつた。

D 日本の場合 日本の歴史的條件・自然的條件は農業部面に於ける在來の耕種様式をそのまゝに持ち越してそれと工業資本主義の移植とが結合された。それだけに國內市場は狹隘たらざるを得なかつたが、外國貿易の發展が日本の工業化過程に對し特別に重要な役割を持つた。

(2) 政府の役割

後進國の工業化過程に關しては保護關稅、その他の政策的措置に依て政府が先頭に立つて工業資本主義を育成・助長した。先進國工業製品の流入、競争を排除して自國工業主義のために國內市場を保證し、又工業主義の擴張・先導性に農業部面を從屬せしめたが、農民を賃労働者として改編するなり、或は農民を農民として存置する場合にはその農民の基礎の維持に努め、可及的に農・工業部門間の不均衡を調整し、工業資本主義と農民の基礎との摩擦の破局化防止に資した。

支那の工業化過程によつて以上諸國の場合と歴史的條件に於て全く異り、農業の自然史的基礎に於ても異つてゐる。

(1) 海外市場發展の可能性の小

世界市場は既に技術的に進歩した大工業、巨大な金融組織の便宜を有する先進國の工業製品で充滿されてをり、低勞賃の威力を以てしても國際競争に打ち克つて海外市場に割り込み得る可能性は殆んど残つてゐない。外國市場に依據する工業業資本主義の發達に依て零落せしめられた農村人口を吸収するだけの展望を持ち得ない、支那に於ける工業資本主義は専ら國內市場のみに求められねばならぬ。

(2) 外國工業製品の國內市場浸蝕

海外市場の見込みがないのみか國內市場自體、不平等條約の拘束、關稅自主權の喪失（後に關稅自主權を得たが、完全なものではなかつた）によつて、外國工業製品が支那市場を占據した。

工業資本主義によつての國內市場は第一にそれだけ大きく制限された。

(3) 支那農業の特質。資本制機械農業の可能性稀薄。過剩人口

外國市場がなくてもその國內に、廣大なる

國土と畜力及び機械使用の資本制大農業展開可能の條件があれば、農民は農業勞働者として收容され、而も農業總生産力は増大して大工業の市場増進の展望を得る譯であるが、支那農業の事情は全く異なる。その國土は廣大であつて、可耕地にして未耕地として放置されており、動力及び機械を使用すれば開墾可能の部分も全然残つてゐない譯ではなく、その部分に關しては機械制農業採用の餘地もあるにはあるが、大體に於て限られてゐる。基本農業地帯では、特にその主要部分を占める水田地帯では水、灌溉を利用することに依て極めて高度の勞働集約的農業が行はれてをる。ヨーロッパの旱地農業では封建制下の粗放農業より資本制農業への移行に當り機械を採用することに依て勞働の生産性を高めるのみならず、土地利用の集約度そのものをも高め得たのであるが、支那農業では（日本農業の場合もそうであるが）土地利用の集約度は既に極めて高度であつて、機械性農業への移行は、一

人の労働者の労働生産性は高め得るであらうが、土地利用の集約度は低下せしめられる。農業經營を粗放化せしめる傾向性が極めて大きいのである。土地利用の集約度低下、農業經營の粗放化は云ふ迄もなく土地の人口給養力又は受容力の低下であつて、人口壓迫は加重せしめられざるを得ない。従つて資本制機械農業を採用し、農民を農業労働者として吸収し、農業總生産力を増大することに依て、大工業の市場増進を期待すると云ふ見込みが支那の場合には缺如するのである。

かかる條件に於て資本制大工業、工業資本主義の進展は何を意味するか。

農業労働は季節的であり小農業にとつて農閑期農業外労働、農家家内工業は農家經濟・生活にとつて不可欠的條件である。資本制大工業による農家労働に農家所得のこの部分の剝奪は農家經濟の破壊、怖るべき農民窮乏となつて現れる。農民所得の減少、農民窮乏は大工業にとつての市場限界となつて撥ね反へる。

農村及び都市の獨立手工業者の場合、大工業による破壊作用は更に直接的であり、迅速である。

農民の窮乏、手工業者の没落、人口壓迫の苦痛を緩和すべき今一つの重要な出口は人口の海外移住にあつた。

だがこゝでも支那の場合、大量的海外移住は『黃色人種』の排斥と云ふ無慈悲な遮斷に遭つてゐるのである。

工業資本主義化の必然論者たるベツプラー氏は冷酷に、だが正しくこの事實を見守つてゐる。「工業化過程が餘りに急速であることは、既にその深みに沈淪せる支那民衆にとつて更に測るべからざる悲慘を意味するであらう。一つの新しい工場が建つ毎に、何百、恐らく何千の人間からその生活の手段を奪ひ去るのである。既に人口充滿せる國に於て労働節約裝置の採用の生ずる作用は二重である。それは生産を増加する。だが生産増加より生

する利益は労働の節約によつて何もかも奪ひ去られた人達の前を擦過し去る。機械化が完成して新しい労働の需要が生ずるまでには二つの生産様式の間の一の深い陥没、人口の一定比率が必ずその中に落ち込むであらう陥没を生ずるであらう」と。

支那四億人口の四分の三を占める農民、加ふるに手工業者群の窮乏の持續的深刻化、従つて飢餓線の自然的突破か、そうでなければ英米經濟學者の支那社會・經濟問題・人口問題解決の最後の託宣たる『産兒制限』、人爲的人口減少か、それが支那に與へられた歴史的條件の下に於ける工業自由資本主義化強行の論理的歸結である。

支那人口の多數が文字通り飢餓線上を彷徨してゐることは事實である。それ故に支那は『飢餓の國』と呼ばれる。産兒制限が社會問題、經濟問題の對症療法であることを認めても認めなくても、工業資本主義化、工業人口の比率擴大が一國人口の増加率を自然に低下せしめる傾向を有するものであることも否めない。確かに人間人口數は一面に於て社會的生産力、經濟機構變化の從屬變數である。だが他の一面に於て、人間自身が生産諸力の中、究極の生産力であり、其他の生産諸力の主體的把持者であることを見失ふならばそれは重大な誤謬である。

『社會的』自然の暴威の前に大量人口の飢餓線以下墜落を『沒法子』^{メイファーズ}として見送るか、或はそれ自身基本的の問題に立ち向はんとする氣力を喪失せしめるところの産兒制限説の『鴉片的』^(補註)魅力に耽溺するか、或は支那の人口大衆が『アジア的』に低い生活水準に堪えながらもその最後の一线を守り、人間が機械の奴隸となり、その下に壓し拉される代りに、たとへ量的には微小であり徐々にではあるとは云へ、人間自身が機械或は道具の主人となることにより、自分自身の力によつて起ち上つて來るかに支那工業化の根本問題は存するのである。

補註(1)

無條件工業資本主義化の懷疑論者、反對論者たるトーニイ、ラムソン兩教授も産兒制限を以て支那人口問題の究極的
根本的解決とする點に於て變りはない。

「工業化は、それ自身としては望ましいものではあるが、移民と同様に、人口統制策としては出生率制限の代用の役目を果
し得るものではない」²⁾「トーニイ

「飢饉救済事業家達が、現在増水した河川から肥沃な平原に殺到する水の破壊力を防ぐ場合と同様に、同じ平原に無統制に
突進する人間を防止する事に關心をもつてこそ始めて我々は飢饉排除に一段の進歩を期待し得るのである。飢えた口の法外
に増殖するのを豫防することは、時折飢饉救済米を以て現にある人口數を周期的に養ふよりは結局効果的である。無制限な
人間の生産は實に國民福祉の敵である」³⁾「ラムソン

自分自身は人口稀薄な廣大な領土、植民地を有しながら「黄色人種」の移民を嚴重に遮断する英米「人道主義者」のこれが
言葉なのである。

(2) 鴉片戦争當時鴉片貿易の『道德性?』を説いて一著者は曰く「支那は決定的に人口過剰國である。鴉片吸食はこの増加を
阻止するが故に善をなすものである。問題のこの點は注意するべきである。この様にして人口増加を阻止することは女の嬰
兒を計量的に水に流すよりははるかによい」⁴⁾と。以前には産兒制限的效果の故に『鴉片』を、そして今は『産兒制限論』そ
のものをそれが英米の支那への好意ある贈物なのである。(未完)

2) Tawney, *ibid.*, P. 141. 邦譯154頁。

3) Lamson, *ibid.*, P. 256. 邦譯330頁。

4) G. F. Davidson, *Trade and Travel in The Far East*, 1846, P. 242.